

〔大鏡〕三太政大臣賴忠略○中あまりよろづ玄た、めあまり給ひて、殿のうちによひに  
ともしたるあぶらを、又のつとめてさぶらひにあぶらがめをもたせて、女房のつばねまでめぐ  
りてのこりたるをかへし入て、又今日のあぶらにくはへて、ともさせ給ひけり、あまりにうたて  
ある事なりや、

〔吾妻鏡〕三壽永三年元暦十一月廿一日丙午、今朝武衛源頼朝有御要、召筑後權守俊兼、俊兼參進御  
前、而本自爲事花美者也、只今殊刷行粧、著小袖十餘領、其袖妻重色々、武衛覽之、召俊兼之刀、即進之、  
自取彼刀、令切俊兼之小袖妻、給後、被仰曰、汝富才翰也、盡存儉約哉、如常胤實平者、不分清濁之武士  
也、謂所領者、又不可雙俊兼、而各衣服已下用麤品、不好美麗、故其家有富有之聞、令扶持數輩、郎從、欲  
勵勳功、汝不知產財之所費、太過分也、俊兼無所于述申、垂面敬咽、武衛向後、被仰可停止花美否之由、  
俊兼申可停止之旨、廣元邦通、折節候傍、皆銷魂云云、

〔澀柿〕明惠上人傳

秦時中左様の年飢は家中に毎事儉約を行て、疊を初として、一切のかへ物どもをも古物を  
用、衣裳の類もあたらしきをば著せざるばしの破たるだにも、古きをばつくるひつがせてぞき  
給ける、夜の燈なく、晝の一食をとゞめ、酒宴遊覽の儀なくして、此費を補ひ給けり、心ある者の、見  
聞たぐひ、涙をおとさすと云事なし、

〔太平記〕三十五北野通夜物語事附青砥左衛門事

報光寺最勝園寺二代ノ相州ニ仕ヘテ、引付ノ人數ニ列リケル青砥左衛門ト云者アリ、數十箇所  
ノ所領ヲ知行シテ、財寶豊ナリケレ共、衣裳ニハ細布ノ直垂、布ノ大口、飯ノ菜ニハ、焼タル鹽干タ  
ル魚、一ツヨリ外ハセザリケリ、出仕ノ時ハ、木鞘卷ノ刀ヲ差シ、木太刀ヲ持セケルガ、叙爵後ハ、此  
太刀ニ弦袋ヲゾ付タリケル、加様ニ我身ノ爲ニハ、聊モ過差ナル事ヲセズシテ、公方事ニハ千金